宗教心理学研究会ニューズレター

第34号　2023.2.28

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集：アラ・ノレンザヤン著『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』を語る ---------- 1
『ビッグ・ゴッド』の概要とその後の展開 ---------- 藤井修平 2
道徳的な神の社会的リアリティ ---------- 坂本　剛 7
無神論者は‘フリーライダー’？？ ---------- 矢吹理恵 9
「ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学」第8章を翻訳して ---------- 林　明明 10
他者教の日本社会と不信仰 ---------- 綾城初穂 11
神は必要か，そして有用か ---------- 小野寺孝義 14
『ビッグ・ゴッド』をめぐる一宗教者の困惑？ ---------- 上中　栄 15
研究活動と向社会的ビッグ・ゴッド ---------- 島井哲志 17
ビッグ・ゴッドとの出会い ---------- 髙須麗子 18
ビッグ・ゴッド仮説の展開と現代日本における検証可能性について ---------- 西田若葉 19
『ビッグ・ゴッド』読後感：
宗教／スピリチュアリティの研究者・実践者間の対話に思いを馳せて ---------- 村上祐介 20
事務局からのお知らせ ---------- 25

特集：アラ・ノレンザヤン著
『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』を語る

2022 年 4 月にアラ・ノレンザヤンによる『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』が刊行されました。本書は宗教心理学研究会メンバーが中心となって翻訳を行ったことからも，宗教心理学研究会ニューズレターにて大いに語る機会を持ちたいと考えて，訳者の皆さま，本書を読まれた皆さまに感想をお願いしました。そして，様々な領域からざっくばらんに語っていただきました。

これらの記事はとても示唆に富んでいて，すでに本書を読んだ方にとっても，まだ読まれていない方にとっても多くのことを考えるきっかけとなるように思いました。「ビッグ・ゴッド」が意味するものは何であるかをぜひこのニューズレターからも味わっていただきたいです。

『ビッグ・ゴッド』の概要とその後の展開

藤井修平(東京家政大学)

宗教心理学研究会のメンバーが協働して翻訳を行った『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』が，2022 年 4 月に誠信書房から刊行された。本書は，宗教の進化という壮大なテーマに社会心理学，宗教認知科学，文化進化論の知見を用いて挑んだ意欲作であり，海外では大きな評判を呼んでいる。本書の射程は心理学や宗教学だけではなく，歴史学や倫理学など幅広い領域の研究者を招き寄せるもので，その広まりによって宗教の心理学的研究についてもますます注目が集まるものと思われる。

本稿では『ビッグ・ゴッド』を理解するための手がかりとして，著者アラ・ノレンザヤンの経歴や本書の概要，学界での評価に加えて，本書の意義についても論じてみたい。

著者について

アラ・ノレンザヤンは米ミシガン大学で社会心理学者リチャード・ニスベットおよび文化心理学者ノーバート・シュワルツに学び，1999 年に博士号を取得した後，カナダのブリティッシュコロンビア大学の教授となった。この時期の研究は，行動は気質・傾性（disposition）から生まれるとする見方に対し，状況的制約の影響を強調するもので，東洋人と西洋人の文化差などを扱う比較文化心理学の方向性も強かった。

ノレンザヤンは博士号取得後に，フランスで人類学者スコット・アトランの指導を受け，とりわけ宗教を研究対象とするようになった。アトランは，『われわれは神を信ずる（In Gods We Trust）』で進化生物学・認知科学的な視点から宗教を論じたことで知られている。

その後彼はブリティッシュコロンビア大学に移り，宗教と協力に関する研究に取り組んだ。2007 年に *Psychological Science* に掲載された "God Is Watching You: Priming God Concepts Increases Prosocial Behavior in an Anonymous Economic Game"では宗教的な言葉のプライミングによって人々がより公正に行動するようになったことを示し，大きな注目を集めている。この研究の視点は，後の『ビッグ・ゴッド』にも繋がるものである。

ノレンザヤンは，同大学で「人類進化・認知・文化センター（HECC）」の共同主任を務めており，ジョセフ・ヘンリックらとともに，同センターが 2012 年から行った「宗教の文化進化研究コンソーシアム」プロジェクトでも大きな役割を果たしている。このプロジェクトは宗教認知科学の拠点を有する英国，デンマーク，チェコ等と共同で進められた大規模なもので，その研究テーマは本書の内容とも大きく関わっている。

こうした経歴のゆえに，ノレンザヤンの視点は，社会心理学をベースに，宗教認知科学と文化進化論の双方を取り入れたものとなっている。宗教認知科学は近年拡大している分野だが，宗教現象は人間が共通して有する認知的傾向性から生まれるとみなすために，そこで生まれる宗教現象はいつでも同じものと考えられやすく，宗教の歴史的変化を探究することは苦手としている。それに対し文化進化論は歴史的な「宗教の進化」を論じられるが，進化生物学的な裏付けが弱いという欠点がある。ノレンザヤンは両者を適切に組み合わせることで，宗教に対してバランスのとれた見方を提示することが可能になっているといえるだろう。

ビッグ・ゴッドの概要

こうした研究の成果を踏まえて，宗教の進化に関する大きな仮説を提唱したのが『ビッグ・ゴッド』である。以下ではまず本書の概要を記述しよう。

最初に，本書全体の問いが 2 つ提示される。1 つ目の問いは，人類史において，1 万 2 千年前にそれまでの狩猟・採集社会から大規模な農耕社会へ，急速に変化していったのはなぜかというものである。第 2 の問いは，同じく 1 万 2 千年前に，人々の社会行動にあまり関心をもっていない精霊などへの信仰に代わって，力強く，人々を罰するなどの介入を行い，道徳的関心をもつ

「ビッグ・ゴッド」への信仰，すなわち向社会的宗教が世界的に広まった理由についてである。ノレンザヤンはこれらの問いに対して，心理学に加えて生物学や認知科学の知見も取り入れ，遺伝子進化・文化進化の双方の観点を組み合わせて取り組むと述べる。

続く本論の内容は，巻頭に記された「ビッグ・ゴッドの 8 原則」にまとめられている。ここで言う原則とは，主に心理学的研究によって明らかにされた，信念や行動の傾向性のことを指すものと理解できる。第 1 原則「監視された人々は良い人々である」は，人は監視されているときにより親切になり，より向社会的に行動することを示している。コーヒーを自由に取って代金を任意で支払えるスタンドで，人の目のポスターを後ろに貼った週の方が，花の絵を貼った週よりも多くの支払いがあった，といった研究がこの主張を支持している。他方で宗教にも，人々の行動を監視し違反者には罰を与える神の観念がある。そのような神を信じるだけで，実際の監視と同様の効果がもたらされることが示唆されている。こうした超自然的存在の監視の信念が向社会的行動を促進するという主張は，「超自然的懲罰仮説」と呼ばれている。

第 2 原則「宗教は人よりも状況のなかにある」は，信念や行動を規定するのは個人の特性よりも状況の影響が大きいという，レヴィン派の社会心理学の視点を宗教に応用したものといえる。宗教心理学においても，パーソナリティ等が信仰や宗教参加の主要な要因であるという見方が強いが，キリスト教徒はミサや礼拝に参加する日曜日に慈善活動により積極的になり，それ以外の日には世俗的な人と変わらないという「日曜日効果」に言及することでそれに反論している。

第 3 原則「地獄は天国より強力である」は，人々の行動を規定する上で，報酬よりも罰の方が効果的だということを指している。宗教においても，神の慈悲深さを強調するか，厳格さを強調するかは場合にはよってさまざまであるが，利他的行動を促進する点では，後者の方が効果的であることが示されている。

第 4 原則「神を信じる者を信頼せよ」は，同じ宗教を信じているということが信頼の指標となり，そうした人々が集まることで協力的な集団が形成されるということを述べている。このことは同時に，宗教を信じない無神論者は信頼されないということも意味している。無神論者は，神の法や神による裁きを信じていないので何をしても許されると思っている危険な人間であるという見方は，現代の米国やイスラム教国でも幅広く存在している偏見であり，その反感は嫌悪や不快感よりも，不信感から来るものであるとされている。

第 5 原則「宗教的な行動は言葉よりもものを言う」は，超自然的懲罰仮説と並んで宗教が協力をもたらす源としての，儀礼の機能について言及している。その背景として，人間集団が協力的な活動を行っていると，自らはコストを負担せず，利益だけを得ていく「フリーライダー」が現れるという問題がある。十全な協力的活動を行うためには，こうしたフリーライダーを発見して抑止または排除しなければならないが，そうしたフリーライダーの発見に儀礼が役立っているとされる。ここで用いられるのが，「コストリーシグナル理論」および「信憑性強化ディスプレイ（CREDs）」であり，これらはいずれも，儀礼がその集団に参与しているということの欺きがたいシグナルとなるので，儀礼に参加するかどうかによって，信頼のおけるメンバーかそうでないかを判断できるということを示している。

第 6 原則「崇拝されない神は無力な神である」は，宗教は儀礼などの公的ディスプレイによって支持者を集め，大きくなっていくことを指している。儀礼などに多大なコストをかける人々がいる集団のほうが，そうでない集団よりも魅力的に見えるということである。この点は，特定の特徴を有する神は常に信仰されやすい傾向性があるとする宗教認知科学の見方に対し，なぜその条件を満たすギリシャの神々は今でも信仰されていないのかという異論から発展したもので，宗教に対しては認知よりも文化の影響が大きいことを指摘している。

第 7 原則「ビッグ・ゴッドは大集団のためにある」は，小規模な社会には道徳的関心をもつビッグ・ゴッドへの信仰は少なく，大規模な社会になるとビッグ・ゴッドへの信仰が増えるという傾向性

について述べている。歴史学的・人類学的事例がその根拠として挙げられており，現代ではキリスト教やイスラム教などビッグ・ゴッドの宗教が支配的なのに対し，過去の狩猟採集集団においてはそうでなかったとされている。

最後となる第 8 原則「宗教集団は競争するために協力する」は宗教間の競争に関するものであり，歴史の上で，ビッグ・ゴッドを信じる向社会的な宗教が，そうでない宗教に勝利してきたとしている。それは第一に，ビッグ・ゴッドの信仰が協力的な，社会的結束の強い集団を作り上げるためであるが，その他にも改宗者の獲得戦略や，出生率の向上などの影響もあることが示されている。

こうした原則を組み合わせると，冒頭の問いに答えることが可能になる。議論の流れを整理すると，次のようになる。①人間集団が大規模化するためには，フリーライダー問題を解決して，協力的な集団を作らなければならない。②そのためには社会的な監視が効果的だが，過去の社会ではそのような制度を作れなかった。③人々が超自然的懲罰を信じることで，宗教は社会的監視と同様の効果を与えることができる。④宗教はさらに，儀礼によってフリーライダー問題を解決することができる。⑤このような向社会的宗教を信じる人々の集団は，そうでない集団よりも協力的になり，競争にも勝つことができた。⑥ゆえに向社会的宗教は，社会の大規模化に重要な役割を果たした。

これに加えて第 10 章では，宗教なしで人はいかに道徳的・向社会的になれるかという問いも検討されている。宗教なしでは道徳的にはなれないという見方は根強いが，必ずしも向社会的宗教のみが協力に至る唯一の方法というわけではない。デンマークなどの世俗化が進んだ国々に目を向けると，信頼のおける統治システム，分析的思考の広まり，安定した社会情勢などによって宗教なしの社会も可能となることがわかるし，そうした社会ではビッグ・ゴッドが必要ないので，無宗教者が多くなっているというのが彼の見方である。

刊行後の反響

本書の刊行に対する反響は非常に大きかった。宗教学系の *Religion* 誌，宗教認知科学系の *Religion, Brain & Behavior* 誌でそれぞれレビューシンポジウムが催され，多数の書評が寄せられた。また 2016 年の *Behavioral and Brain Sciences* 誌には本書の内容を再構成した論文に対し，27 本のレビューが載っている。

そうした書評から心理学的な観点からの指摘を取り上げると，心理学者ジャスティン・バレットらは，第 2 原則「宗教は人よりも状況のなかにある」に異議を唱えている。彼は，ノレンザヤンが挙げた研究はイスラム教徒などを対象にしているが（本書 53-54 頁），個人的要因が十分に考慮されておらず，もし参加者が宗教的でなかったとしたら，慈善的な行為はなされなかっただろうということを否定できないと指摘する（Barrett and Greenway, 2015）。また宗教学者アン・テイヴスは，言及されている協力へのインセンティブが外発的動機づけに偏っているとして，個人の信仰の内面化や目的意識といった内発的動機づけもまた，協力を生み出しうると述べている（Taves, 2014）。これは宗教心理学の第一人者オルポートの視点を踏まえており，そうした視点からすると，ノレンザヤンの主張は偏っているということである。

一方でノレンザヤンに対する宗教学者の反応は，歴史的観点から異議を唱えるものが多くを占めていた。多くの研究者は，ノレンザヤンの描く宗教の進化のシナリオが実際の歴史的事例と合わないとしている。しばしば挙げられるのが古代中国や古代ローマの例であり，これらは決してビッグ・ゴッドの信仰に頼ることなく，大規模化を実現できたとしている。最も根本的な批判は，「心理学的な実験は歴史的証拠に取って代わることはできない（Thomassen, 2014: 669）」とするものであり，本書のテーゼそのものを不可能としている。

こうした批判的な反応に対し，ノレンザヤンは第一に，ビッグ・ゴッドが社会の複雑化に貢献した唯一の要素ではないし，向社会的宗教とビッグ・ゴッドは大規模協力を達成する唯一の手段ではないと自らの主張の限定を行った上で，本書で述べているのは向社会的宗教が大規模な協力の出現と維

持を促進するという統計的因果関係であるため，個別の反例はそうした統計的傾向の否定にはならないと反論している（Norenzayan, 2015）。

それではどのような研究が彼の主張を検証しうるのかという点について，ノレンザヤンと共同研究者が提案するのが，歴史的データをコーディングしたデータベースの量的分析である。これはさまざまな資料から「道徳的な神を信じているか」など特定の要素に関する情報を取り出し，比較可能にしたものである。現在ではブリティッシュコロンビア大による Database of Religious History や，米フロリダの進化研究所による Seshat: Global History Databank などが存在している。

そして実際に，これらのデータベースを用いてノレンザヤンの説の検証が行われた。それが 2019 年の *Nature* 誌に掲載された"Complex societies precede moralizing gods throughout world history"で，ここでは Seshat のデータベースを用いて，社会的複雑性と道徳を課す神の出現した年代を比較したところ，ノレンザヤンの説に反して，社会的複雑性が道徳を課す神に先行するという結果が得られた（Whitehouse et al., 2019）。この研究は大きな話題になり，日本でもいくつかの紹介記事が書かれている。この論文はオックスフォード大学のチームが主体となって行われたものだが，これに対してノレンザヤン側はデータの扱いに問題があると異議を唱えた。彼らによれば，論文では道徳を課す神の有無を示す証拠がないケースを「不在」としてコーディングしており，それを取り除いて分析すると，論文とは逆の，道徳を課す神が社会的複雑性に先行する結果となったというのである（Beheim et al., 2021）。この反論を受けてオックスフォード側は誤りを認め，論文は撤回されることとなった。Nature 誌上のこの出来事は，データベース分析という方法の未成熟さを示すものといえるが，こうした研究への関心が高いことは事実であり，今後の発展が期待されている。

ビッグ・ゴッド理論と関連する心理学的研究

『ビッグ・ゴッド』における宗教の歴史的発展に関する主張には異論も多いが，他方でその心理学的側面については，本書の視点を踏まえた研究は着実に拡大しつつある。

宗教に関する心理学的研究の例を集めた *The Cognitive Science of Religion*（Slone and McCorkle Jr., 2019）を参照すると，罰する神を信じている人は自ら他者を罰する傾向が減るかどうか，宗教的信念と環境どちらが利他性に影響するか，宗教的信念が内集団びいきを促進するかどうか，儀礼へ参加している人はたとえ他宗教でも信用されるかどうかなど，本書の主題と関連する研究が数多く収録されている。

日本でもこうした研究は行われており，ノレンザヤンの宗教的信念は心の理論と関連するという見解（本書 20-21 頁）については，石井辰典らによる研究で，日本人においても心の理論の程度と宗教的信念は関連するという結果が得られた（Ishii and Watanabe, 2022）。また前述の宗教的な言葉のプライミング研究についても，宮武・樋口（2019）が日本で再現を試みたが，こちらは成功しなかった。この結果について宮武らは，実験において用いた「神社」「仏」「キリスト」の語が日本語では罰や道徳と結びついていなかったと述べている。こうした宗教と道徳に関する研究は近年活発に行われているが，日本においては心理学的な研究に限らず，宗教と道徳はあまり結び付けられることはないといえる。宗教と道徳の関係が，とりわけ一神教の浸透した西欧に特有なものなのかについても，検討の価値が大いにあるといえるだろう。

宗教と道徳という主題は，道徳心理学と呼ばれる領域の一部でもある。ノレンザヤンも参照しているジョナサン・ハイトの『社会はなぜ右と左にわかれるのか』は邦訳も存在しているが，本書では道徳の次元の一つとして「神聖／堕落基盤」が設けられているなど，宗教が重要な要素として登場している（ハイト，2014）。こうした点からも，道徳心理学もまた宗教と関連する領域として，大きな可能性を有しているといえるだろう。

おわりに：本書の意義

これまで見てきたように，ビッグ・ゴッド理論に

ついては毀誉褒貶が激しいが，そのことは本書が扱っている領域の広さと，読者の関心の高さを反映しているものといえる。実際，本書のテーゼはさまざまな方面から検証が可能だし，発展の見込みもあるものと思われる。

心理学的な面についていえば，本書では宗教が心の理論や目的論といった認知的傾向性や，協力行動や利他行為，偏見や紛争と関連していることが示されており，それぞれの面からの研究はさらに広がりうるものである。

また歴史的な面では，何より日本の宗教とビッグ・ゴッド理論との関連が第一に取り上げるべきものとなるだろう。果たして日本にはビッグ・ゴッドのような道徳を課す神への信仰は存在するのか，もし存在したのならば社会の大規模化とは関連しているのかという問いは，たとえそれ自体はこの理論の検証に寄与しなくとも，論じるに値するはずである。

さらにこうした検討は，道徳と宗教の関係についてのより広い議論にも繋がるものといえる。とりわけ現在の日本では，宗教を信じていない人は信用できないとか，不道徳であるという見方は広まっていないように思われるが，だとすれば日本人の道徳観を支えているものは何なのか。日本人の道徳と，ノレンザヤンの描く道徳は同じものなのか。こうした問いに関しても，大いに検討する価値があるように思われる。

ノレンザヤンが「私は，『ビッグ・ゴッド』は進化する議論の始まりであって，継続する論争への招待状だと思っている（Norenzayan, 2015: 74）」と述べているように，本書が宗教と心理に関する議論をますます活性化させることに期待したい。

参考文献

Barrett, J. L., and Greenway, T. S. (2015). Big Gods can get in your head. *Religion, Brain & Behavior*, 5(4), 9-14.

Beheim, B., Atkinson, Q.D., Bulbulia, J., Gervais, W., and Gray, R.D. (2021). Treatment of missing data determined conclusions regarding moralizing gods. *Nature*, 595, E29-E34.

ハイト，J. 高橋 洋（訳）（2014）．社会はなぜ左と右にわかれるのか——対立を超えるための道徳心理学　紀伊國屋書店

Ishii, T., and Watanabe, K. (2022). Do Empathetic People Have Strong Religious Beliefs? Survey Studies with Large Japanese Samples, *The International Journal for the Psychology of Religion*, (33)1, 1-18. DOI: 10.1080/10508619.2022.2057059.

宮武 沙苗・樋口 匡貴（2019）．The effects of culturally specific religious priming on a Japanese sample in an anonymous dictator game.　上智大学心理学年報, 43, 41-47.

Norenzayan, A. (2015). Big questions about *Big Gods*: response and discussion, *Religion, Brain & Behavior*, 5(4), 327-342.

Slone, D.J., and McCorkle Jr. W.W. (eds.) (2019). *The Cognitive Science of Religion: A Methodological Introduction to Key Empirical Studies*. London: Bloomsbury Academic.

Taves, A. (2014). Big Gods and other watcher mechanisms in the formation of large groups. *Religion*, 44(4), 658-666.

Thomassen, E. (2014). Are gods really moral monitors? Some comments on Ara Norenzayan's Big Gods by a historian of religions. *Religion*, 44(4), 667-673.

Whitehouse, H., François, P., Savage, P.E. et al. (2019). RETRACTED ARTICLE: Complex societies precede moralizing gods throughout world history. *Nature*, 568, 226-229.

道徳的な神の社会的リアリティ

坂本　剛（中部大学）

このたびはA.ノレンザヤン「ビッグ・ゴッド」の本邦訳書ご出版につき，誠におめでとうございます。本書は道徳的な神と協力などの向社会性的な人間行動との関連についての仮説を提唱，検討している。道徳的な神の出現が社会集団の規模拡大を可能にすると考える本書のビッグ・ゴッド仮説に対して，イギリスの人類学者Whitehouse et al.（2019）が，歴史的データベースの分析から大規模社会の出現の方が道徳的な神に先行することを指摘し，同時に分析データとコードを公開した。その後，ビッグ・ゴッド仮説を支持する Beheim et al.（2021）とWhitehouse et al.（2021）の反論・議論がNature 誌上で展開されたことも話題となり，一連の展開が，仮説の構築とその検証をめぐって科学研究のコミュニティが健全に機能していることの証左ともなった。本書は宗教と道徳や社会集団の大規模化をめぐる現在進行形の議論から慎重に導出されたビッグ・ゴッド仮説を提唱するものであるが，上記の議論の存在が示すように，様々な批判の対象や議論の参照点となりながら同研究領域を進展させていく基盤のひとつとしての機能を期待されているようにも思える。

筆者は訳者の一人として分担章の翻訳に参加させていただいた。あくまで個人的に気になったことや感じたことを感想等としてここで共有させていただければと思う。一点目は道徳的な神のその道徳性について，進展著しい道徳心理学の知見を活かした検討が可能ではないか，という感想である。二点目は道徳のリアリティや正当性が個人や社会の中でどのように形作られるか，ナラティブなアプローチと社会生態学的なアプローチからの検討が可能ではないだろうか，という感想である。

神の道徳性を特定する：道徳心理学の展開から

宗教的信念が道徳と結びつき道徳的な神が出現すると，この道徳的な神の存在は人々の協力的な行動実践を容易にし，大規模で複雑な社会を支える基盤となる。本書の特徴はこのようないわば大きなストーリーを複数の学問領域における実証的研究の知見をもとに精緻に組み上げ，検証していく点にある。しかし基本的には，道徳と協力を暗黙裡に一義的に結びつけることで，それらの内容検討については議論の射程の外に置いているように思われる。すなわちどのように道徳的な神と，人々のどのような種類の道徳的な協力行動に関連がみられるのか，その体系だった検討という課題の存在である。神の道徳性は恐らく一類型のみではないだろうし，人間の道徳的な行動にも当然様々なバリエーションが考えられよう。

近年，道徳の諸要素を行動進化の観点から統合的に体系立てて説明しようとする試みと検証が盛んに行われている（e.g., Curry, 2016; Fiske, 1992, 2004; Haidt, 2012）。例えばゲーム理論をもとに道徳の要素を協力と関連づけ，協力としての道徳要素をまとめた Curry（2016）のモデルでは，様々な葛藤事態の解決策となるプレイヤーの協力的行動のパターンから，(1)親族への協力，(2)所属集団への協力，(3)正負の互酬性，(4)勇敢さ，(5)敬意と従順性，(6)公平性，(7)所有権の尊重，といった 7 つの道徳要素を挙げており，さらに民族誌的記録の検討を通して，これらの道徳要素が人類の多くの社会に共通して確認できることを示している（Curry, Mullins, & Whitehouse, 2019）。また中分・Burdett・Jong・Whitehouse（2017）は各地方の民話における超自然的存在の出現と道徳要素の関連を検討し，民話の超自然的存在が必ずしも道徳要素を伴うわけではないことを見出している。これら道徳研究の展開から，神概念に伴う道徳性とその社会文化的影響のもとで人々が示すと考えられる道徳性の特定及び類型化に関する検討は今後の課題となり得ると考えられる。

道徳性をめぐる相互作用：ナラティブ及び社会生態学的アプローチから

神の道徳性や道徳規範はどのように暮らしや行動に影響を与えるのかという問いにとどまらず，神の道徳性が個人や社会の中でどのようにリアリティを伴った正当なものとして形作られるかという相互作用の検討はますます重要視されるのではないかという感想を抱いた。

柴山（2000）は（発達研究における）文化心理学的アプローチの重要性は，発達という現象の切り出し方を，「個体内で生起する微細な変化」から「個人が具体的な社会集団の実践に参加することで生起するダイナミックな変化」へと拡張的に組み直そうとする点にあると指摘する。人間の心的過程としての道徳性や協力行動と社会文化的制度としての宗教や宗教的な道徳規範との関連性を検討するうえで，こうした文化心理学的アプローチは極めて有効なはずである。生活の中の行為観察とナラティブに基づいた検討は，人が様々な行為や意思決定をいかに宗教的な道徳性と関連づけて道徳的なものや正当なものとして認識し，さらにそれらがいかに社会文化的制度として機能するかという相互作用の解明を可能にする一つの方法だろう。

また本書は世界各地の人類学的・歴史的な記録も参照しつつ，心理学研究のWEIRDな偏りを指摘したうえで，普遍性の高いモデルとしてビッグ・ゴッド仮説の検証を行っている。それでも人間行動や社会の想定モデルは主に北米や西ヨーロッパ社会の在り方をイメージさせ，道徳的な神の基本モデルはやはりユダヤ・キリスト教的な神概念が基軸となり，そのうえで普遍的モデルへの展開を模索しているようにも感じられる。日本社会と仏教，神道や民俗信仰との関係について，果たしてどの程度，本仮説に基づく説明が可能なのだろうか，疑問にも思った。

しかし同時に，道徳的な神への信仰と社会の複雑化という観点から，新しい社会の在り方を模索して揺れ動く変革期にある様々な社会と人間行動を背景に，どのようにして強靭な道徳が形作られ，維持されていくかの過程を説明・予測するのに役立てられるのではないかとの可能性も感じられた。

例えば日本社会に広く浸透した勤勉，倹約，謙譲，孝行などの日常的な生活上の道徳（通俗道徳）の普及は，江戸時代後期から明治時代にかけて市場経済が広く浸透していく中で農村を中心に人々の生活が不安定になったことと関連している（安丸，1999）。この時期，困窮した生活への対処や贅沢への誘惑に対する戒めから自己鍛錬・自己責任と強く結びついた通俗道徳が，正しい生活規範として，ときに新宗教や農村復興運動の形で社会へ普及し，「近代日本社会の様々な困難や矛盾を処理するもっとも重要なメカニズム（安丸，1999，p.13）」となった。さらに現在でもこれらこそが日本の社会的価値の伝統であり，従来からの生活規範であるかのように認識される機会も多い。安丸は一連の論考の中で地域ごとの社会経済的な特徴と新宗教や農村復興運動を関連付けた考察も行っているが，ここからは，自己鍛錬や責任を強く求める道徳のリアリティが社会や個人のいかなる暮らし方とその基盤となる生態学的な条件から立ち上がってくるのかという，まさしく新たな社会文化的制度の形成と維持のダイナミックな過程の検討という研究命題の存在が指摘されるだろう。すなわち社会生態学的なアプローチに基づいて，市場経済の普及と各地域の生活の不安定さ，そして宗教的・道徳的制度の形成維持との関連を解明しようとする試みである。

本書は，人間行動の社会文化的基盤を検討することの重要性のみならず，人間行動と社会文化的基盤の相互作用の検討の重要性をあらためて読者に認識させてくれる，刺激に満ちた議論を提供するものである。

引用文献

Beheim, B., Atkinson, Q.D., Bulbulia, J. et al. (2021). Treatment of missing data determined conclusions regarding moralizing gods. *Nature*, 595, E29-E34.

Curry, O.S. (2016). Morality as cooperation: A problem-centered approach. In T.K. Shackelford & R.D. Hansen (Eds), *The evolution of morality. Evolutionary psychology*

(pp. 27-51). Switzerland: Springer, Cham.

Curry, O.S., Mullins, D.A., & Whitehouse, H. (2019) Is it good to cooperate? Testing the theory of morality-as-cooperation in 60 societies. *Current Anthropology*, 60(1), 47-69.

Fiske, A.P. (1992). The four elementary forms of sociality: Framework for a unified theory of social relations. *Psychological Review*, 99, 689-723.

Fiske, A.P. (2004). Relational Models Theory 2.0. In N. Haslam (Ed), *Relational models theory: A contemporary overview* (pp. 3-25). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon Books.

中分遙・Emily Burdett・Jonathan Jong・Harvey Whitehouse (2017). 民話における道徳的存在と超自然的示唆 日本人間行動進化学会第 10 回大会プログラム, 28-29.

柴山真琴 (2000). 社会文化的アプローチからの示唆——上村論文に対するコメント—— 心理学評論, 43(1), 40-42.

Whitehouse, H., François, P., Savage, P.E. et al. (2019). RETRACTED ARTICLE: Complex societies precede moralizing gods throughout world history. *Nature* 568, 226-229.

Whitehouse, H., François, P., Savage, P.E. et al. (2021). Retraction Note: Complex societies precede moralizing gods throughout world history. *Nature*, 595, 320.

安丸良夫 (1999). 日本の近代化と民衆思想 平凡社 (初版刊行年 1974, 青木書店)

無神論者は‘フリーライダー’？？

矢吹理恵(東京都市大学)

私が担当した第 5 章のタイトルは,「ただ乗りする人(フリーライダー)としての自由思想家(フリーシンカー)」だ。

みなさんは「フリーライダー」と聞いて, 何を思い浮かべるだろうか？

電車でキセル(最近は PASMO や SUICA の普及で, 難しくなったが)をする人, 学校やマンションの掃除当番をサボる人, 文化祭や体育祭の準備を手伝わない生徒, ざっと挙げただけでも, 嫌な感じがする。こういう人が周りにいて欲しくないし, 自分が職場や学校でこのレッテルを貼られたら, さぞやりにくくなるだろう。ビジネス・シーンでも,「何かと理由をつけて負担が増えそうな仕事をしない人」,「他人の手柄を横取りする人」,「給与泥棒」が「フリーライダー」と言われ,「会社からフリーライダーを減らすこと」が効率的な経営に必要だとされる。私の専門の家族心理学でも,「DINKS や独身主義の人たちは, 子育ての苦労を放棄しながら, 将来の社会保障を要求するフリーライダー」,「年金を納めていないのに, もらえる専業主婦(夫)はフリーライダー」, はたまた「専業主婦(夫)の無給の家事労働によって, 社員を目一杯働かせることができる会社はフリーライダー」という議論もある。

いずれにしても,「フリーライダー」には,「自分は何も差し出さないのに, 得られるものはタダでもらっていく」=「ズルい」という意味があるようだ。

本書の 5 章では, 宗教的な社会では無神論者が「フリーライダー」とされ, 脅威を引き起こす存在として不信感の対象となっていることが, 数々の実験的研究によって示される。そして宗教的な社会における信仰心がある人々にとっては, 自分達とは異なる規範を持っているように見える民族的外集団の人たちや同性愛者よりも, 規範がなくてなんでもありに見える無神論者の方が, より不信感の対象となるという。

日本が宗教的な社会かどうかは置いておいて, 日常生活の人とのコミュニケーションで自分の信仰について語ることがほとんどない私たちにとっ

て，「無神論者」＝「ズルい」という感覚はないだろう。日本で「無宗教」と答えるノリで，海外で自己紹介をするとびっくりされることが多い。そもそも，自称「無宗教」の日本人が，日本で日常生活で宗教について考えたり，話題にしたりするのは，冠婚葬祭や宗教が絡む特別な事件が起きた場合ぐらいではないだろうか。

そのような日本人が，向社会的宗教国出身者との国際結婚によって海外に住む場合，家庭や職場や地域で，常に宗教を意識しながら暮らすことになる。加えて，国際結婚の場合は，親族関係・夫婦関係・親子関係というプライベートな領域で宗教と対面せざるをえない。「あなたの宗教はなに？あなたの信じる神はなに？」と聞かれて，「無宗教」と答えることの意味は，日本と本書で言うところの向社会的宗教国とでは異なるのだ。ましてやその問いが，信仰者である愛する人や愛する人の親族からあなたに向けて発せられた場合，あなたは自身の宗教や信仰について向かい合い，内省せざるを得なくなる。なんとなく「…うーん，無宗教…」答えた途端，あなたには「無神論者」（=「フリーライダー」）というラベルが貼られ，信仰者である親族の中で居づらくなったり，反対に信仰者になるべく宗教儀礼に呼ばれたりする。親族の一員として受け入れてもらうために，確信がないまま，入信のための儀礼に参加したりする。子どもが生まれれば，赤ちゃんに対する宗教儀礼をやるかやらないかで，親族を巻き込んだ家族会議となる。家族そろって「神の国」に行くことが奨励される宗派であれば，信仰をやめた途端に，親族から引き戻しの圧力がかかる。子どもの成人式を祝う儀式にも出席できなくなる……。

海外に出て宗教を生活に取り入れることは，悪いことばかりではない。その国のメインな宗派の信仰者となれば，各地に信仰者のコミュニティがあり，「ただの日本人」としてではなく「同じ神を信じる仲間」として受け入れられる。信頼してもらえる。海外で，ただでさえ孤立しがちな外国人の立場にいるものとして，これほど心強いことはないだろう。

このように，国際結婚にかかわらず向社会的宗教国出身のパートナーとプライベートな関わりをもつ場合，日本にいたときには考えもしなかった「宗教とのつきあいかた」が日常的な課題の一つとなる。「なんとなく無宗教」なのか，「意識的に選択した無神論者」なのか。パートナーを通してその宗教に出会い，心から信仰心をもつ場合もあれば，その国で生きやすくするために，あえて意図的に入信する場合もあるだろう。

「あなたの宗教は？」と聞かれ，「…無宗教」と答えることの意味を，改めて考えさせられた5章であった。

「ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学」第 8 章を翻訳して

林　明明（理化学研究所）

この度はご縁があり，「ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学」第 8 章「協力と競争の神」の翻訳を担当しました。この本の概略につきましては，既に他の先生もお書きになっているかもしれませんので紹介はしませんが，宗教の分野へ興味のある方も，心理学へ興味のある方も，様々な方が興味深くお読みいただける一冊であるかと思います。

私自身は，もともとストレスと認知機能について実験心理学寄りの研究をしており，パーソナリティやストレスによるメンタルヘルスへの影響などについても検討をしていました。その流れで，宗教によるメンタルヘルスへの影響にも興味を持ち，ご縁があり宗教心理学の研究へも少し携わらせていただきました。

第 8 章は，本のサブタイトルにもあります「協力」について焦点を当てた章です。ただし，章のタイトルには「協力」の他に「競争」の文字もついています。「競争」という語は本章内では本のサブタイトルにもある「対立」の語と共にほぼ同じ意味で使用されていることもあるため，ある意味「協力」と「対立」について述べている章ともいえま

す。宗教は人と人の協力に利するものなのでしょうか？競争や対立を煽るものなのでしょうか？それともその両方なのでしょうか？これらについては，第８章や本書全体を通して説明されています。

この章を翻訳した最初の感想としては，あまり宗教に関する前提知識を必要とせずに読める，というものがありました。宗教について焦点を当てて述べているのではなく，あくまで人の協力行動や集団としての団結，競争や対立の発生などについて，それらに影響する要因として宗教という要素を取り上げていますので，本章に登場する各宗教・宗派について詳しく知らなくとも，著者の理論を読むためには支障はないと思われます。そのため本章では，各宗教・宗派に関して訳者注は入っていません。もちろん，それぞれの宗教・宗派について知識があれば，より深く納得できるものがあり，より本章を楽しめると思います。

人と人を結びつけるものは宗教だけではありません。本章の中でも，道徳など，他の団結をもたらす要因についても取り上げています。宗教はあくまで一要素として取り上げており，初めから宗教についてのみ述べているわけではありません。しかし読み進めていくと，他集団に打ち勝ち，文化を広めていくことには，やはり宗教が大きく貢献していることが分かります。

さらに，本章では，なぜ宗教によってある集団が生き延び，またはその文化が広まっていくのかについて，宗教の役割を分解して，さまざまな研究のエビデンスをもって客観的に説明しています。私自身がデータを取得するエビデンスに基づく研究を行っていたこともあり，なじみのある説明の仕方のように感じましたが，もしかすると信仰のある方や宗教家の方が読むと少々機械的すぎる分析の印象も受けるかもしれません。しかし数値によって示されると，例えばなるほどこうして世界的に見て世俗的人口に対して宗教的人口が増えていくのだな，などと納得できるかと思います。もちろん，本章の最後でも述べられているように，著者のノレンザヤン先生も集団に対する宗教の効果はすべて判明しているとは言っていません。まだまだ，分からないこともあります。これらについては，今後も研究エビデンスをもとに議論が進められていくかと思いますので，研究の進展が楽しみなところです。こちらのニューズレターをお読みの皆様の中には，すでにこの本をお手に取った方やご興味を持ってくださった方も，そうではない方もいらっしゃると思いますが，まずは皆様に宗教に関するこのような興味深い検討がされていることをお伝えできれば幸いです。

他者教の日本社会と不信仰

綾城初穂(駒沢女子大学)

圧巻の『ビッグ・ゴッド』

身近な人に協力する程度の利他性しかもたない人間が，無数の人々と途方もないほど大きな社会をどう築き上げたのかという問いを，道徳的関心を有するビッグ・ゴッドという人格神の存在から解き明かす本書の内容は，とにかく圧巻だった。

まず驚いたのが，これほどに大きなリサーチクエスチョンが，心理学の手法によって検討されている点である。人類学や社会学，経済学といった他分野の（時にエスノグラフィックな）研究が豊富に参照されつつも，議論の中心は無作為割付による実験を頂点とした実証的研究とその理論的考察であり，論理実証主義的な心理学研究の底力を強く印象付けられた。さらに，スリリングで生き生きとした記述と，内戦下のレバノンで育った著者の静かだが熱い問い，そして，訳者の先生方の高い技量と細かい配慮の詰まった非常に読みやすい翻訳のおかげで，本書に専門書特有の難解さは皆無であり，終始魅了されながら読んだ。

こんな大研究は一生無理だと感じつつも，本書を読んで研究意欲が大いに刺激された。ビッグ・ゴッドによる超自然的監視が利己的な人間に広大な社会を作ることを可能にさせたという本書

の主張を，現代日本に当てはめてみるとどうなるのだろうか？本書でも紹介されていた独裁者ゲームを日本で検証した研究によれば，欧米圏のように神や神聖といった言葉で宗教をプライミングしても金銭の配分に違いは出なかったようなので（Miyatake & Higuchi, 2017），そのまま適用することは難しいかもしれない。お天道様という言葉をプライミングしたらどうなったのだろうという疑問はあるものの，「神様に見られている」が現代日本でそれほど影響力を持たないというのは，確かに実感とも近い。

世俗的監視に基づく「他者教」の日本

宗教が社会秩序に寄与する根拠の一つとして，本書では，宗教を喚起されると自分を犠牲にしてでもフリーライダーを罰するようになる，という心理学実験が引用されている（Laurin et al., 2012 など）。これに関連して私が思い出したのが，参加者がお金を出し合って利益を得る公共財ゲームを日米で比較した研究である（Cason, Saijo, & Yamato. 2002; 西條, 2006）。それによると，アメリカ人参加者は他の人がどう行動するにしても自分の利益が最大になるような投資行動をした一方で，日本人参加者は，他の人がゲームに参加しないでフリーライドの利益を得る場合，相手が最も損をする投資行動をしたという。つまり，アメリカ人参加者は（宗教が喚起されていないので）自分の利益を最大化する方を選ぶが，日本人参加者は（宗教が喚起されていないのに）フリーライダーを罰する方を選ぶというわけである。重要なのは，この結果，最終的に日本人のゲーム参加率が 8 割を超え，個人が選択する場合に合理的と考えられる 7 割程度の参加率を示したアメリカよりも投資効率が高くなった点である。本書の進化論的議論に基づけば，フリーライダーへの懲罰をコミュニティ内の成員一人一人が直接担う社会はコストが高く，この意味では日本はやや前時代的である。しかし，それが実際に社会全体に大きな利益を生んでいるとすれば，むしろ日本は他者による監視がビッグ・ゴッド的な機能を持つよう独特の発展を遂げた，いわば「他者教」社会と言っても良いのかもしれない。

他者のズルに義憤に駆られる傾向が我々の社会の秩序を生んでいるというのは，実感とも近い。しかし，他者教によって自己犠牲すら厭わないほど公平性を追求する心理が日本の人々に培われたと考えると，ゲーム相手の（数千円程度の）フリーライドへの不寛容は説明できる一方で，公人が関与する（数千万円規模の）不正に対して何とも言えない寛容さが見られることについては説明がつかない気もする。我々の社会において，権威者は監視すべき「他者」ではないのだろうか。実際，日本では古代から近世に至るまで租税や年貢の軽減を求める一揆はあっても撤廃を求めた運動はほとんどなかったそうで（網野, 2005），権威の不可侵性という意味では，日本は「他者」教というよりは「お上」教なのかもしれない（音も"かみ"でちょうどいい）。これと関連付けて良いのか分からないが，先に挙げた Miyatake & Higuchi（2017）の研究でも，警察や司法といった言葉をプライミングすると，有神論者の方が無神論者よりも金銭を多く配分するという興味深い結果が報告されている。この研究に参加した「有神論者」に特定の宗教を信じる者は多くなかったため，要するにこの結果は，信心深い人の方が世俗の権威に敏感であることを端的に示しているのではないかと私には感じられる。昨今の報道を思い浮かべると同時に，キリスト教を（一応）信仰する私自身の嫌な面を突き付けられた恥ずかしさもある。

本書の議論に基づけば，安定した警察・司法制度を持つ世俗的権威に信頼する（北欧に代表される）社会は，超自然的存在に基盤を置く社会からの進化を表しているとも言え，この意味では，日本はむしろ進歩的とさえ言えるかもしれない。しかし，個人の利己的行動がコミュニティの損害に直結する村社会ならばともかく，個人の行動の影響もコミュニティのあり方もきわめて複雑な現代社会においては，フリーライドに目を光らせて権威に盲従する他者教精神は，相互不信を煽る，社会的影響力の大きい権力者を免責するといったデメリットの方が大きいように感じる。日本人の信仰心が減ってきている（小林, 2019）のは，この意味では希望かもしれない。

宗教に働きかける利他的な不信仰

本書を読む中でひとつ気になったのが，信者が宗教に影響を受けるだけの存在と見なされていた点である。コミュニティ内の相互交流がビッグ・ゴッド隆盛の鍵だとするならば，信者が宗教に働きかける側面についても考慮する必要があるように思う。確かに，信仰の共有が信頼に関わるコストを大幅に減らしてコミュニティを発展させ，それゆえ不信仰が忌避されるようになったという議論は説得力がある。しかし，信者は一枚岩ではない。信仰を持つと同時に（不信仰にも）疑問も抱く。無宗教の異邦人を信頼し，コミュニティから軽蔑されている者の中に神を見ようとすることすらある。時に謙虚に頭を垂れ，時に怒りに震えながら神に祈り訴える信者の中には，結果的に神から（つまりコミュニティから）離反する者もいるだろうが，場合によっては神を（つまりコミュニティ自体を）変えることもあるだろう。キリスト教で言えば，例えばユダヤ教からの発展とか，より最近では，同性愛や女性牧師への姿勢の変化とかに，そうした信者の"不信仰"による宗教の変容が表れているように思う。

こうした"不信仰"は，利己的な欲望に基づくものというより，利他的な欲求に基づくものである。そのため本書の議論に沿えば，宗教が生み出した道徳的感情に端を発すると言えるかもしれない。ただし，道徳的感情は本書では主に宗教コミュニティを維持・強化するものと説明されており，コミュニティの崩壊にすらつながり得る不信仰を内包しているものとまでは想定されていないように思う。私自身は，こうした他者へのケアに基づく不信仰には，本書が（おそらく意図的に）踏み込んでいない宗教の非世俗性，つまり神秘さや崇高さといったスピリチュアリティの一つの鍵があるように感じる。なぜならここには，道徳的関心を有する神に利己的な人が従うというビッグ・ゴッド的な社会構造ではなく，神の道徳的関心を有する人が己の利他性に従うという，いわばスモール・ゴッド的な人格構造をみるからである。このように考えるならば，超自然的存在から安定した世俗的制度への移行という本書が示唆する社会の変容だけでなく，個々人が非世俗性を有するようになる人格の変容も検討する余地があるかもしれない。

若者のスピリチュアリティによる日本社会の変化

他者へのケアに基づく不信仰が伝統的宗教と内集団の人格変容を招くという仮説は，お上を戴く他者教の日本にも適用できるだろうか？考えてみれば，家父長制の権化のような政財界が自己責任を善とする新自由主義的な教義を推奨しているのとは対照的に，女性や性的マイノリティへの理解（十分とは言えないが）に代表されるような，社会から不当な扱いを受ける他者を，その人の立場に立って配慮し支えようとする倫理的姿勢は，特に若い世代では一般的になってきているような印象がある。他者教は，不信仰な若者によって今や変革されつつあるのかもしれない。

関連して思い出したのが，数年前に非常勤先の大学で出会ったある受講生のことである。授業開始前に私の方におずおずとやってきた彼女は，「提出課題を忘れてしまいました」と声を震わせて述べた後，驚くことに「すいませんでした。初穂さん」と述べた。当時は教員への敬意がこれほど様変わりしたのかとあっけにとられたが，よくよく吟味してみると，この発言には，課題を忘れたことは（震えるほど）反省しつつも，しかし安易に権威に盲従しない（ファーストネームにさん付け），彼女の倫理的姿勢が表れている，ような気がしてくる。考えてみれば，この世代は「すごい」とほぼ同じ意味で「神」を使う。彼女たちにとって，尊敬する権威は雲の上にいるのではなく，呼びかけられるほどの距離にいる。確かにこの受講生の発話にも，権力者である教員の私を自らが属する対等なコミュニティに寛大にも招き入れている響きが感じられる，ように思えなくもない。

この新たな他者教の教義においては，社会的弱者だけでなく，公人をはじめとした権力者もまた彼女たちと地続きの他者である。マイノリティの人々にも政治家にもインスタグラマーにも「かわいい」と言う彼女たちは，決して無礼なのではない。他者のケアに基づいた不信仰をきわめて自然に実践しているのだ。伝統的な他者教と比較的硬派なキリスト教にがんじがらめの私は，彼女

たちのように「推しが神すぎて尊死する」とは口が裂けても言えないが，旧来の教義を逸脱する物言いは崇高なスピリチュアリティの表れとして甘受すべきなのだろう。注意しなくて良かった。

引用文献（『ビッグ・ゴッド』を除く）

網野善彦（2005）．日本の歴史を読み直す（全）筑摩書房

Cason, T. N., Saijo, T., & Yamato, T. (2002). Voluntary participation and spite in public good provision experiments: an international comparison. *Experimental Economics*, 5(2), 133-153.

小林利行．(2019)．日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から．放送研究と調査，69(4), 52-72. doi:10.24634/bunken.69.4_52

Laurin, K., Shariff, A. F., Henrich, J., & Kay, A. C. (2012). Outsourcing punishment to God: Beliefs in divine control reduce earthly punishment. Proceedings of the Royal Society B: *Biological Sciences*, 279(1741), 3272-3281.

西條辰義（2006）．経済学における実験手法について考える――「日本人はいじわるがお好き!?」プロジェクトを通じて　経済学史研究，48(2), 51-66. doi:10.11498/jshet2005.48.2_51

Miyatake, S., & Higuchi, M. (2017). Does religious priming increase the prosocial behaviour of a Japanese sample in an anonymous economic game? *Asian Journal of Social Psychology*, 20(1), 54-59. doi:10.1111/ajsp.12164

神は必要か，そして有用か

小野寺孝義(広島国際大学)

宗教と科学を区別するものは何だろうか。超自然的現象を認めるか否かが一つの基準と思う人はいるかもしれない。しかし，これは正しくない。超心理学の研究者は超常現象を扱うが，その説明原理に神を持ち出してくることはない。基本的なスタンスは現在の科学では説明できていないが，いずれは説明されるであろう現象を研究するということである。超常現象をさらに絞り込み，奇跡という現象まで引き上げれば両者の区別になるかもしれない。多くの宗教は奇跡を売り物にしているし，その説明原理として神を持ち出す。一方で科学による奇跡の説明原理は確率・統計になる。どんなに起こりそうにないことでも，無限の試行回では起きるということである。末期がんの患者が回復することも，飛行機事故で空中に放り出されて生還することも多数回の観察では起きうる。宇宙で人間が存在していること自体が奇跡という考え方に対しても無数の宇宙，すなわち多元宇宙を想定すれば説明がつく。ではその多元宇宙自体はどうやってできたのか，あるいは誰が作ったのかという質問が生じるかもしれない。宗教はそこに神を持ち出すかもしれない。しかし，そこに人格神，すなわち人間のように考え，感じ，行動する（願いを聞き入れ，時には罰する）神を想定する必要はない。神は数式かもしれないし，自然法則と呼ぶべきものかもしれない。宇宙の発生も無限の試行から必然的に，かつ自発的に生じたものかもしれない。確率・統計という貧弱な武器だけが奇跡の説明原理というのは納得がいかないかもしれない。しかし，心理学が明らかにしてきたように人間は常に論理的な考え方をするわけではない。感情的になり，たやすく状況に影響される。また，ベイズ確率が直感と相反する結果を導き出すことがあることからもわかるように，人間は数学や確率を正確に見積もることも不得意である。

話を「ビック・ゴッド」に戻すと，これはリチャード・ドーキンスの「神は妄想である」（早川書房，2007）のように宗教と科学を論じた書ではない。宗教に関する社会心理学研究を概観させてくれるだけではなく，文化や国家間の宗教観，歴史まで踏み込んだ内容となっている。一貫している

テーマは宗教には超自然的な監視機能を持っているという仮説である。人はたとえ誰かが見ていなくても悪い行いを神に監視されていると思うことで行動が変容すると考える。

これには疑問も生じてくる。例えば，超自然的監視に神の概念，あるいは宗教は必要なのだろうか。超自然的監視機能ということで思い出されるのは俳優・故丹波哲郎である。書籍でベストセラーになり，シリーズで映画化された「丹波哲郎の大霊界」もある。インタビューで霊界を信じているのかを問われて，自分が信じているかどうかは問題ではなく，死後，地獄があるのだということを知らせることで犯罪や悪い行いを減らせるのだと述べていた。「ビック・ゴッド」は神や宗教を前提とするが，丹波は宗教を提唱したわけでないし，必ずしも神を前提にしたわけでもない。そうなると監視機能は必ずしも神を前提とする必要がないことになる。死後世界を仮定し，そこでも生活することが続くことが前提とされるなら，今の生き方に影響することだろう。

別な疑問も湧く。戒律が極めて厳しく，日常生活に支障をきたしているのではないかとさえ思える宗教もある。著者は厳しさが信心への証明となる説を紹介する。ここで思い浮かぶのは高校の校則問題である。規則を破る，あるいはマナーがなっていない生徒が多ければ多いほど校則は細部にわたり，厳しくなってしまう。厳しい戒律を求める，あるいは必要とする国民性，あるいはパーソナリティはあるのだろうか。

このように次々と疑問が湧いてくる「ビック・ゴッド」は何かの結論が得られる本というよりも，読み進めていくうちに研究仮説がどんどん湧いてくるソースという方がふさわしい。また宗教に関する社会心理学実験のノウハウが数多く紹介されていることも目新しく，貴重である。実験心理学的に宗教を研究対象にしたい研究者には必読の本と言えるかもしれない。何よりも日本に関する研究の紹介が少ない。興味を持った研究者にとっては未開の荒野が目の前に広がっているようなものである。本書はその原点になってくれるのではないだろうか。

『ビッグ・ゴッド』をめぐる一宗教者の困惑？

上中　栄（日本ホーリネス教団旗の台・元住吉教会牧師）

学術の世界とは無縁な一介の牧師ですが，『ビッグ・ゴッド』にはいろいろ考えさせられました。同時に，悩みも深まりました（笑）。そんなバイアス満載の文になりますが，一宗教者として少しばかりのことを記してみます。

まず本書で目に留まったのは，ビッグ・ゴッドの第 3 原則「地獄は天国より強力である」の部分です。というか，そこから抜けられずにいるのですが，「意地の悪い神こそが善人を作る」ことを実証した実験は興味深く，比較的禁欲傾向が強い教会で育った筆者には，心当たりさえあります。そしてこの原則自体に異論はないのですが，では，意地悪な神に監視された善人，ある意味で規律に支配された善人の心は，健やかなのかという問いが生まれます。

遠藤周作は，「背徳の意味するもの」という小さな論考の中で，「背徳者（イモラリスト）」〔Immoralist〕と「無道徳者（アモラリスト）」〔Amoralist〕の違いを説きます。「無道徳者」は，道徳に関心を持たず，既成の価値観に反抗するのではなく，道徳や良心の問題に無感覚な人，一方「背徳者」は，既成の価値観に反抗する人で，道徳や良心の問題に鈍感なのではなく，敏感なためにその重圧に苦しんで裏切った人を指します。ドン・ファンとカサノヴァがその例です。

そして「背徳者」と「無道徳者」の違いは，「背神論者」と「無信仰者」と同じだと言います。「背神論者」は神の存在を認めながらもそれに逆らう人で，信仰的な葛藤を覚えながらも神に背くのに対し，「無信仰者」は神の存在などどうでもよく，神に逆らう生き方に何の葛藤も覚えない人を指します。この理屈をビッグ・ゴッドにあてはめれば，

背神論者にとって，神は「意地の悪い神」ということになりますし，本書第 10 章とも関連するかもしれません。

こうした議論に関心を持ったのは，戦時下のキリスト者たちが，天皇を崇敬し神社に参拝すると表明したのは，緊急事態時の自己保身的な「背神論者」的行動だとすればまだ理解できるものの，実際には「無信仰者」的，つまりどうやら本気で天皇を崇敬していたらしいことが分かってきたからです。その傾向は，緊急時ではない今日のキリスト教界にも当てはまると見ています。

例えば，日本のプロテスタント教会でも，牧師によるセクシュアル・ハラスメントなどの不祥事が起きます。すると，所属教団の処分で牧師を辞めさせられたが被害者への謝罪を拒む者，所属教団の処分が出る前に牧師を辞めた者，所属教団に処分されながら自分の非を認めずしぶしぶ牧師を辞めた者，そうかと思えば，不祥事の原因は所属教団の人事権を持つ執行部にあるという摩訶不思議な主張をして現職に留まっている者など，およそコンプライアンス的にアウトな反応が相次ぎました。

これらの牧師には共通点があります。それは，神に赦しを請い，神に赦されたと主張することです。神に赦されるというのは，ある種の宗教体験と言えます。しかし，神に赦されると，社会的な責任までも免れるという発想に直結してしまうのです。もちろん，キリスト教信仰はそんなバカな理屈を支持しませんから，やがて彼らが言い開きをするのは，聖書の神ではなく閻魔様に対してではないかと思うほどです。しかし，どうやら本人たちは本気で自分は赦されていると考えており，それが宗教体験であれば彼らが属する教団はその主張を覆すことは出来ません。そしてそれを支持する牧師やキリスト者が，思いのほか多いのです。

つまり宗教者が「無信仰者」的なのです。この現象は，「意地の悪い神こそが善人を作る」の対極とも言えるもので，「心優しい神こそが偽善者を作る」となります。こうなると，もはや宗教は必要ない，キリスト教に存在意義はない，とも言えるでしょう。筆者は，身内の恥をさらしていい気になっているわけではなく，割と本気で困惑しているのです。

ただ，もう一つ「第 3 原則」をめぐって思い起こされたのは，カール・ヤスパースが戦争責任について論じた『責罪論』です。よく知られているように，ヤスパースは罪の区分を，法律に反した「刑事犯罪」，国民として負うべき「政治上の罪」，良心の呵責を覚える「道徳上の罪」，そして「形而上的な罪」の四つに分けました。日本で戦争責任を問うた知識人たちもこの議論は知っていましたが，「形而上的な罪」には踏み込みません。それを実存主義哲学者が「形而上的な罪」と言うのですから，セクハラ牧師の安易な宗教体験よりは，よほど真剣な知的営みと言えるでしょう。ビッグ・ゴッドの諸原則がある種のアイロニーを含むとすれば，ヤスパースの主張は，宗教者が見習うべき実直な議論だと思います。その真剣さを失った宗教には，存在意義があるのかとさえ思います。冒頭に用いた陳腐な表現「健やかな心」は，ここに関係します。

しかし遠藤周作は，日本人の罪意識は人の眼に対する恐れに過ぎず，神という絶対者のない風土で「背徳者（＝背神者）」はあり得ないと言い，現代日本人は「無道徳者（＝無信仰者）」だと断じます。日本の知識人が形而上的な罪に踏み込まない理由も，この辺りにあるかもしれません。そして遠藤が指摘する現実は，認めざるを得ないと思っています。つまり宗教者の悩みは深まるのです。

とは言え筆者は，ビッグ・ゴッドの諸原則に，宗教者としてもう少し抗ってみたいと思いました。それはこの議論に対立するのではなく，自分の姿を映しつつ思索してみたいという向上心です。

参考文献

遠藤周作　「背徳の意味するもの」『講座　現代倫理』第 8 巻、筑摩書房、1958 年

K.ヤスパース（橋本文夫訳）　『責罪論』ヤスパース選集Ｘ、理想社、1965 年

上中　栄　「罪責感について」『協力と抵抗の内面史』新教出版社、2019 年

研究活動と向社会的ビッグ・ゴッド

島井哲志（関西福祉科学大学）

1. 研究倫理審査とビッグ・ゴッド

職場で研究倫理審査を取りまとめる仕事を仰せつかることがある。私としては，せっかくの良いアイデアや試みを支援したいと思って，喜んで責任を引き受けさせていただいてきた。主として書面でだが，取りまとめなので，審査を受ける人の主張も，また審査を担当する人の意見にも接する。

審査を受ける人のかなりの割合は，この手続きを，単純に研究を開始するためのステップとみなしている。したがって，審査に合格するために最低限何をすればよいのかに興味があり，労力をかけずに，最小限のコストで審査を通過することを願っている。

審査する側にも全く同じタイプの人はいて，そこでは自分自身も最低限のチェック作業のコストで済ませる戦略が取られる。しかし，それより多いのが，審査者の役割に忠実な審査者で，研究協力者の保護は譲れないという戦略のもと，細かな手続きも協力者の権利保護をチェックする。そしておそらく研究計画を審査する段階では，これで十分なことも多い。

一方で，これらの観点では，倫理審査は，研究のためには障害＝邪魔ものであり，役に立たない余計なことと位置づけられている。研究がめざす真実の追求という目的のために，倫理審査が積極的な役割を果たしているとは考えられてはいない。

これは，どちらかといえば不誠実な人間のほうが幸運を獲得する世界である。大きな目的につながるビッグ・ゴッドは前提とされてはおらず，利他性を生み出して真実をつかさどるビッグ・ゴッドの姿は，ここにはない。

2. 利益相反はビッグ・ゴッドによってチェックされるか

研究不正の代表となる，データの捏造や改ざん，また，他人の仕事の盗用といった不正行為は，研究とは異なる必要性から生じる。整合的なデータを示すことで投稿論文の掲載をはかり成果を増やすことが，社会的地位の獲得や個人の利益になることもあるのかもしれない。

この話題は利益相反 COI(Conflict of Interest)と呼ばれており，日本心理学会では，学会発表に際して公表することが求められ，規則が定められている。そこでは，利益相反は，「企業または営利を目的とする団体等から得る個人的な経済的利益と(その人の)活動とが相反している状態あるいは両立しえない状態」と定義されている。

しかし，その規則による経済的利益の額をみると，企業などからの報酬や原稿料は年間 100 万円以上，講演料は年間 50 万円以上，研究費や寄付金は年間 200 万円以上とされ，これら未満では規則上利益相反ではない。いったいどれほどの人がこんなに高額の謝礼をもらっているのか知りたいが，これが現実的だと判断する根拠もあるのだろう。

私の知る心理学の知見からは，人間という存在が，ちょっとした目先の利益によって行動が影響されることが常識であるが，その専門集団の日本心理学会では，100 万円程度の金額では，研究の方向性には問題になるほど影響を受けないと判断しているらしい。

私は，もっと低額でも自分の研究が影響される可能性があると思うし，この規定を無視して，学会発表に際して，これまでにいかなる経済的なつながりもないと宣言することがあるが，これはローカルにはルール違反だろう。

3. 研究生活とビッグ・ゴッドの恩恵

私が研究しているポジティブ心理学では，文化的背景をもつテーマも多く取り上げられる。当然のように，研究論文や書籍の 95%以上は英語で書かれており，その欧米文化を背景にしており，そこでは明示されてはいないが，ビッグ・ゴッドは活躍している。

個人的には，私は，長らくキリスト教教育を経験しプロテスタント教会に所属している。したがっ

て，欧米の文化の背景を理解するのがおそらく容易であり，それを共有して，ほとんど同じ文脈の上で議論したり，研究を構想したりすることができるかもしれないと思う。ビッグ・ゴッドの働きを理解していることが研究する力となっている。

また，アメリカで生活している時に，身につけていたネクタイピンが教会の子どもたちを教えた活動を長年続けた記念にもらったものだと説明すると，それを知った周囲からの，人間としての信頼がかなり高くなったことがある。

こう見ると，私個人は，研究を進めるうえでも，個人の信頼を得るうえでも，ビッグ・ゴッドの恩恵を受けているといえそうだ。先に，研究倫理や利益相反に関して，現状を批判的に紹介したが，自分自身の研究活動にビッグ・ゴッドによるチェックを意識しており，それがより批判的な主張につながっているという仕組みだろう。

ビッグ・ゴッドとの出会い

高須麗子

自分は，日常的に神なるものと真剣に対峙する機会はない。とは言うものの，初詣に行かないと，神様に見放され不吉な一年になったら困るので，必ず参拝する。お守りも手に入れる。子どもの節目には，神様にご挨拶をしないと，子どもが健全に成長できなくなるのではないかと思い，初宮参りや七五三のお参りは欠かさない。子どもが受験をする時期が来たら，間違いなく，御朱印集めをするであろう。

祖父母が亡くなった際のお葬式では，お坊さんのお経を聞きながら，故人への感謝を想い，無事に極楽浄土に辿り着けます様にとお祈りをした。

自分はクリスチャンのお葬式に参加した事はないにも拘わらず，自分のお葬式は，教会で挙げてもらいたいと思っている。それは，結婚式の時の商業的な教会の挙式の讃美歌が美しく，自分がこの世を去るときは，あの美しい音色に囲まれて天に上がりたいと感じるからである。20 数年前，バチカンで迎えたクリスマスが印象的で，それ以降，クリスマスは，サンタクロースの登場ではなく，イエス＝キリストの誕生をお祝いする意識が芽生えた。

この様に，自分の中の宗教文化は，神道なのか仏教なのかキリスト教なのか，あやふやであるが混在しながらも存在している。しかし，その神々に対しそれ以上の関わりと認識はない。

本書との出会いによって，神に対して見え方が 180 度変化した。それは，神の存在や教えといった宗教的な側面ではなく，ビック・ゴッドという向社会的宗教の神に，社会構造機能があるのではないかということを感じた点である。厳密にいうと，それが，構造なのか機能なのかは，浅薄な自分にはわからない。故に知りたい事が増えた。

小さな狩猟採集社会から大規模な農耕社会へと変化した理由と，道徳的関心をもつビッグ・ゴッドへの信仰・向社会的宗教が世界に広まった理由を考えるという壮大なテーマを解明するために，宗教学や社会心理学をはじめとして，認知科学や考古学，人類学，行動経済学，社会学など実に学際的な研究を，著者であるアラ・ノレンザヤン氏が華麗に紡ぎ結論へ導いていた。いわば，科学の交差点の様な著書に出会うことができ，ここに様々な領域の研究が重なり合う事の重要性をひしと感じる。

感覚的にハッとした部分があった。それは，無神論者は信頼されない。いわば偏見ともとれるという内容であった。前の章では，ビッグ・ゴッド信仰者は，社会において信頼される。互いに信頼しあう協力的な集団を形成すると述べられている。

日本人でビッグ・ゴッドを持たない人は，大まかに捉えると無神論者とも受け取れる。世界で活動する場合，これを表出する事は信頼に作用することを教育現場で伝える必要があるのではないか。たとえ仕事でなくとも，旅先であなたの神は誰？と聞かれる。その際，このセンテンスを

知っているか否かで，その後のコミュニケーションに違いが出るのではないかと感じる。

本書の中で気になるテーマがあった。それは，宗教なしで，人は道徳的向社会的になれるのかという問いに対し，世俗化が進んだ国を参照すると，信頼のおける統治システム，分析思考の広まり，安定した社会情勢などによって，宗教なしの社会も可能という結論に至っていた。果たして，日本はこの条件を満たしているのか否か，近々の社会情勢を鑑みると疑問を持つ。感染症の広がりや自然災害の頻発など，実存的な不安や恐怖も，増大傾向にあるのではないかと危惧する。日本はビッグ・ゴッドを強くは持っていない。この先，私達の日本社会には必要なものは何か。今後どの様に進化を遂げていくのか，大変気になるところである。

世界中が不安定な今こそ，変容する宗教と協力と対立の心理学の視点で世界を見据え自分の社会を確認することが重要なのではないかと考える。この貴重な研究を翻訳下さり，自分の様な者にも理解と知見を与えて下さった諸先生には感謝しかない。

ビッグ・ゴッド仮説の展開と現代日本における検証可能性について

西田若葉（宮崎産業経営大学）

本書では，「ビッグ・ゴッド」の概念が今日までの人類史における文化的，社会的な発展に寄与してきたという提唱が，様々な学問的知見に基づき丁寧に積み上げられているという印象を受けた。第 1 章では人間の集団規模の拡大化や，互恵性の安定化とフリーライダーの抑止，結びつきの強い小集団から現代の大きな匿名社会への変容に，向社会的宗教におけるビッグ・ゴッドの普及が関わっていることがある種の軽快さを伴って取り上げられる。第 2 章では，そもそも神を知覚するための我々に備わる心のはたらきについてクローズアップされる。以降の章では，心理的，文化的，遺伝的，民俗的，歴史的な視点が組み合わさり，全ての章が螺旋を描くように序盤から提示されたテーマに立ち返りながら，宗教と競争や対立の関わり，信仰者と無神論者の相互的な認識，世俗化社会における無神論者の増加やその経緯，現代の世界における宗教の役割や可能性といった示唆に富んだ展開が繰り広げられる。

これまでの人生で宗教心理学の体系にほとんど触れてこなかった私自身にとって，序盤から人類史における社会の変遷と，信仰された神の特徴が取り上げられていたことは，宗教の中核概念に関するさわりの部分から学ぶ機会となり，本書を読み通すための原動力となった。それと同時に，現代人の祖先にあたる狩猟採集社会と現代の大きな匿名社会における，集団社会や神の特徴の違いから，次のような推測や疑問が生じた。

まず，「それぞれの集団における神の特徴は，その時点で集団に備わっていない権能に対する願望が投影されており，現実の困難に対する葛藤を集団内で克服できる方法として，信仰の興隆に寄与したのではないだろうか」と考えた。 例えば，かつての日本で雨乞いを目的としていた水神信仰の儀礼は，現代においても祭りや文化財として全国各地で存続されている。現代社会において，水神信仰の元来の趣旨に則り，儀礼を積極的に実行しようとする者は，水の安定的で多量な供給を必要とする個人や小集団（農業や飲料製造業の従事者など）が中心となる可能性がある。逆に言えば，上記以外の個人や集団で，生活インフラの範囲内で常に水を使用できる者は，水神信仰の趣旨を日常的に意識することなく，儀礼を他律的な風習やイベントの側面のみで解釈する可能性があるということである。以上により，「信仰とは，人間が集団や社会において不足や欠落を感じる物事を超自然的存在に投げ込み，それらを解決する権能への希望や絶望もまた，宗教儀礼を通じて超自然的存在へ委ねる行為として解釈されるのではないだろうか」と推測された。

もう 1 点，上記を踏まえると，「『きわめて世俗

的な国民国家』（序文より）である現代日本という我々の生活圏では，いったいどのような不足や欠落が超自然的存在に投げ込まれ，それらに対する葛藤が克服されているのだろうか。」という疑問が生じた。本書の序文では，著者自身の来日経験を通した現代日本人の宗教性を的確に示す洞察がなされている。その記述は，日本における信仰や超自然的存在の成立と変遷，現代の世俗主義においてもなお宗教的な信念の火を支える「炎」や信仰へ向かわせようとする「文化の力」（第 10 章より）の解明への方向性を指し示しているように感じられた。

その方向性へ進むためには，本書で実践された古代から近現代に至るまでの多様な学術的視点とそれらのコンシリエンスを日本における研究アプローチに取り入れることが重要であると考えられる。例としては，日本における文化的，政治的な伝統やその転換点と密接に関わってきた，神道および仏教の成立や習合，分離，国家との一体化や解体，現代に至るまでの宗教的要素の継承などを心理学的な観点も踏まえて検討することがあげられる。このような研究の実現には多数の困難を伴うことが予想されるが，現代の日本における宗教に対する認識の混迷やフリーライダーが引き起こす問題，それらの波及による偏見や差別などの不利益から人々を守ることに寄与できる可能性に思いを馳せている。

『ビッグ・ゴッド』読後感：宗教／スピリチュアリティの研究者・実践者間の対話に思いを馳せて

村上祐介（関西大学）

はじめに

本稿を執筆している最中，あるインターネット記事が目に止まった。外交官の多賀敏行氏が，1970 年代当時，外務省の研修制度で英国に留学した際，自らを無神論者である（「I'm an atheist」）と説明したところ，「同世代である 20，30 代の英国人，米国人の若者も，下宿先のおばさんも，一様に反応がおかしい。『atheist』の単語を使うと，みな一瞬凍りついたような表情をして妙な雰囲気が漂」ったそうだ（永井，2022）。本書『ビッグ・ゴッド』は，なぜ，このような場の空気が生じてしまったのかを理解するための，一つの視点を提供してくれるかもしれない。本稿では，本書の概要や刊行以降の議論を紹介し，簡単な所感をまとめてみたい。

本書の成り立ち

本書は，進化・認知・社会科学を中心とした関連領域の膨大な知見に依拠しながら，宗教や道徳，また集団・社会や文化の形成とその共進化を，「ビッグ・ゴッド仮説（Big Gods hypothesis）」の観点から説明しようとするものである。

著者のアラ・ノレンザヤン（Ara Norenzayan, PhD）氏は，ブリティッシュ・コロンビア大学で心理学の教鞭をとる教授であり，本書でも紹介されている宗教認知科学に関する幾多の業績を残されている。ノレンザヤン氏は，レバノンの首都ベイルートのご出身であり，1970～80 年代のレバノン内戦の動乱の中を生き抜いてこられた。レバノン内戦は，主にキリスト教とイスラム教の宗教紛争として知られるが，文字通り宗教が死活問題となる環境での生い立ちが，集団や宗教に関わる諸問題への関心をもたらすに至ったようである。

本書が提唱するビッグ・ゴッドとは，「一日中細かく人を監視し，真摯な献身を求め，逸脱を罰し，良い行動には報いる」（p.173）という特徴をもった超自然的存在であり，また，そうした存在について人々が素朴に共有する信念を指す。ビッグ・ゴッドは，唯一神や創造主の形をとることもあれば，先祖の精霊のような多神的特徴で語られることもある。本書は，ビッグ・ゴッドの「8 つの原則」を中心に，ビッグ・ゴッドを生み出す心理的メカニズムや，このような向社会的宗教が，信

頼と協力を必要とする大規模な共同体の勃興と相互に関連してきた歴史的プロセスを描写している。

本書の概要

前半に該当する第 2～6 章では，向社会的宗教の信念形成や社会性に果たす役割について，主に心理学的な観点から論じられている。まず，第 2 章では，超自然的信念は，ヒトにデフォルトで備わっている心の働きが生み出す多様な信念の一つであることが主張されている。例えば，メンタライジングや心の理論，素朴な心身二元論，目的論的直観という生得的な心理特性によって，私たちは，非物質的で，人間のような心を備えた精神体の存在（つまり神）を表象することができる。このように，人間の行いに関心を示す（と表象できる）神的存在は，大規模集団では直接的な人間同士の監視が及びにくくなるという社会的監視の限界を補完し，超自然的監視という形で，人々に，向社会的で協力的な行動を取らせる機能を果たすに至った（【第 1 原則　監視された人々は良い人々である】）。また，宗教プライミング等の実験パラダイムを通じて，特に信仰者において，宗教が顕現化された規範となり，意思決定に影響し得る他の要因に対して認知的優位性を示す状況下では，不正の抑制等の向社会的行動を促進することが明らかになっている（【第 2 原則　宗教は人よりも状況のなかにある】）。そして，こうした宗教の影響は，親切で寛容な博愛的な神よりも，意地悪で懲罰的な神を意識した場合により顕著であることを示す一連の研究も紹介されている（【第 3 原則　地獄は天国より強力である】）。

第 4 章では，地域的民族的により遠方にいる他集団との長距離交易ネットワークの発展の歴史を紐解きながら，ビッグ・ゴッドへの誠実な信仰が，信頼のおける協力者を識別するシグナル＝「宗教的バッジ」（p.100）になったのではないか，という論が展開される（【第 4 原則　神を信じる者を信頼せよ】）。超自然的監視者に恐れを抱く者への選好は，近年の実験研究でも支持されており，さらに，その信頼の範囲は，宗教的な外集団（異なる神への信仰者）にも，ある程度拡張される。第 5 章では，第 4 原則を受け，無神論者に対する偏見（「神を信じない者を信頼してはいけない」p.96）と，そうした偏見の低減に寄与し得る要因が論じられている。興味深いことに，無神論者への偏見は，スティグマ化された個人や集団に対して抱かれるような恐怖や嫌悪に根ざしたものではなく，無心論者がフリーライダーになり得ることへの脅威，すなわち道徳的な不信感に関する脅威に特徴づけられる。

続く第 6 章では，誠実な信仰者にとって別の脅威である，宗教的偽善者の問題が論じられている。もし，ビッグ・ゴッドへの信仰を表面的に装った者が集団に参加し，偽善者が利益を不正に享受する機会が増えた場合，自己の利益の損失のみならず，集団や協力関係が消失するリスクが高まる。そこで，相手が口先だけではないことを見抜くのに役立つのが，「信憑性強化ディスプレイ（CRED: credibility-enhancing display）」と呼ばれる，過度な献身的行為である（【第 5 原則　宗教的な行動は言葉よりもものを言う】）。公共の祈り，痛みを伴う儀礼，犠牲の行為といった特に信憑性のあるディスプレイによって高い誠実性が示されるほど，集団内の他の成員も，信仰や同様のディスプレイを模倣し，信仰の文化的伝染が生じる可能性が高くなり，そのようなディスプレイの対象となる超自然的存在は，ある文化内で特に選好されることになる（【第 6 原則　崇拝されない神は無力な神である】）。

本書の後半，第 7～9 章の試みは，ビッグ・ゴッドを信奉する向社会的集団の形成と発展を，人類史という大規模なスケールで解明することである。第 7 章では，エスノグラフィーや文化比較標本を用いた量的研究の知見から，比較的小規模の集団である狩猟採集社会では，人間の道徳的問題に関心を示す超自然的存在は稀である一方，集団サイズが大きく複雑性の高い社会になるほど，神が超自然的懲罰の役割を担う比率が高いことが示されている。血縁選択や互恵性，文化的制裁といった協力を促進する要因に加え，ビッグ・ゴッドの存在が，大規模集団の勃興に不可欠だったのだという（【第 7 原則　ビッグ・ゴッド

は大集団のためにある】)。また，内集団成員の関係調整が特に重要になるのは，外集団との対立が顕著な状況においてである。ビッグ・ゴッドのような，個々の利己性を抑制し，社会団結を促進する文化を有する集団は，集団間の葛藤状況を有利に乗り越え，その勢力を拡大していったものと思われる(【第 8 原則　宗教集団は競争するために協力する】)。そして，その拡大を後押ししてきたのは，向社会的宗教が有する文化的安定性，改宗の巧みさ，繁殖優位性といった要因である。

第 9 章では，宗教的対立に焦点があてられる。ノレンザヤン氏は，ビッグ・ゴッド仮説の主張に依拠しつつ，不寛容や暴力と結びつき得る宗教の側面として，(1)超自然的監視の外部にいる者への不信用，(2)宗教的参加による社会的連帯がもたらす集団間対立，(3)宗教的な聖なる価値による妥協の阻害，を暫定的に列挙している。ただしこれら 3 つの視点は，いずれも流動的で，自集団の相対化や宗教的他集団への理解，価値の再構成といった試みに，対立を克服する活路を見出し得ることも示唆されている。

最後に，第 10 章では，世俗的な社会と宗教的な社会の関係，不信仰(無神論)の要因について論じられている。世俗的な社会が有するビッグ・ガバメント(警察，司法，その他の社会制度等)と，宗教的な社会のビッグ・ゴッドは，いずれも，(1)大規模な協力や信頼を促進する監視機能を有する，(2)逆境で安らぎを与える，(3)個人的コントロール感が脅かされる場合，外部からコントロールと安定を提供する，という点で共通している。両者のいずれが優勢になるかは，ある文化や国家によって異なり，現代の一部の国家のように，実存的安全性が確保され，高等教育や科学的・分析的思考へのアクセスが容易な社会では，向社会的宗教が果たす役割は小さくなっていく。「神のいない協力的な社会」(p.250)は，果たしてその勢力を強めるのだろうかー。

ビッグ・ゴッド仮説に関する議論の簡単な紹介

本書は，宗教史上のユニークな出来事と現代のヒト心理の関連をクリティカルなリサーチ・クエスチョンで結びつけ，領域横断的にエビデンスを積み上げながら，宗教と集団の進化の過程に一貫したストーリーを提示している。宗教に関する心理学的研究に一つのロードマップを提供するだけではなく，宗教紛争や無神論者への偏見等，現代社会が抱える課題への具体的な対応策を提案している点も，評価されてしかるべきだろう。私個人としても，学ぶべきところが大変多く(少なくとも，宗教的な外集団と接する日本の知人や友人に，冒頭の記事のような，ばつが悪い状況を回避するための助言はできそうである)，とりわけ，経済ゲームやプライミング等の手続きを駆使した実験が様々に紹介されており，方法論の面でもアイディアを刺激された。

一方，原著刊行(2013 年)以降，批判も含め，当該仮説に関する様々な議論が展開されている。以下では，本領域の今後の研究に資するであろう，これらの動向や論点についても簡単に触れておきたい。

本書「あとがき」でも触れられているが，2014 年には，*Religion* 誌と *Religion, Brain and Behavior* 誌で，レビュー・シンポジウムが企画された。これらのシンポジウムを概観した Skjoldli (2015)のエッセイでは，本書に対してあげられる批判として，研究法(宗教史からピックアップする実証例の偏り，プライミング手続きの議論)，因果関係の不明瞭さ，理論的枠組である文化進化論に関する説明の不十分さ(特に，生物学的進化論との弁別)，「宗教」の概念化の問題，実験の従属変数の妥当性(向社会性のみならず服従も測定しているのではないか)などが紹介されている。そして何より，「ビッグ・ゴッド」という概念そのものの欠陥ー神に関する概念の包括的記述というより，超自然的エージェントが有する複数の特徴のうち，自説に適した特徴のみの記述に終始しているのではないかーに関する批判もなされている。

このうち，研究法に関する批判について補足しておくと，本書で度々言及される宗教プライミングや潜在連合テスト(Implicit Association Test)については，その効果や妥当性に関する議論が継続されている(e.g., Schimmack, 2021)。例え

ば宗教プライミングについては，ノレンザヤン氏と共同研究者が，宗教プライミングを用いた 92 の研究に対するメタ分析を行い，中程度の効果量が存在すること，また，プライミング効果は非宗教者には確認されなかったことを報告した（Shariff et al., 2015）。しかし，その後，このメタ分析に関する方法論的・統計学的懸念が指摘され，別の研究チームによって再度メタ分析が実施された。その結果，推定法により，宗教プライミングの向社会的行動への正の効果が確認される場合と，確認されない場合があることが明らかになり，宗教プライミング効果の実証には，事前登録（プレレジ）やマルチラボによるプロジェクトが必要であることが提言された（van Elk et al., 2015）。実際に，ノレンザヤン氏の初期の実験に対して，一部手続きに変更を加えた事前登録制の再現研究も実施されたが，宗教プライミングの有意な効果は確認されなかったようである（Gomes & McCullough, 2015）。

この他にも，社会学的観点からの考察（McCaffree & Abrutyn, 2020）や，ビッグ・ゴッドが社会の複雑性の増加に寄与した，という因果関係の主張を否定する実証研究（Whitehouse et al., 2022）が発表（*Nature* 誌から撤回した論文のリテイク）されるなど，本書や追従する議論に触発され，宗教と集団ダイナミクスの関連性を明らかにしようとする動向を確認することができる。

おわりに

以上の通り，ビッグ・ゴッド仮説は，文化進化に軸足を置きながら，多様な領域の知見を一貫したストーリーとしてまとめあげている点に魅力を感じられる反面，各方面からの批判も一定数存在する。当該仮説の妥当性を確かなものにするためには，心理学や宗教学を中心とした学問領域でさらなる知見を蓄積し，議論を重ねていく必要がある。既に本邦でも，関連する研究がいくつかあるものの（e.g., Ishii & Watanabe, 2021; Miyatake & Higuchi, 2017），例えば，向社会性を従属変数とした場合の宗教プライミング研究に必要なサンプルサイズは 766 名という報告もあり（van Elk et al., 2015），ラボの協働等を通じて，より頑健な知見の生成が期待される。また，宗教関連のネガティブなニュースのインパクトが小さくない日本において，無神論や不可知論であること，あるいは，宗教団体に所属する／しない状況で，信憑性強化ディスプレイや情熱的な献身を示すことは，社会的関係の中でどのような機能を果たすのだろうか。他文化と比較した場合の知見の一貫性についても興味は尽きない。

さらに，本書の論点とは少々ずれるかもしれないが，そのような研究知見を積み重ねていく過程を通じて，宗教離れが進行する日本（e.g., 小林, 2019）で，宗教・霊性文化の継承に真摯な姿勢で臨む立場にある人との対話の扉が開かれることも期待したい。例えば，宗教関係者向けの『月刊住職』誌（2022 年 9 月号）の特集記事では，「実利的な情報ばかりが好まれる現代に，果たして針山や釜茹でといった地獄の物語は有効なのだろうか」という問いが投げかけられており（興山舎, n.d.），世俗社会における宗教的ナラティブへの問題意識を読み取ることができる。また，ビッグ・ゴッド仮説は宗教に対する文化社会的な説明を与えこそすれ，それは，超越的存在の全てを説明することを意味するわけではない。例えばトランスパーソナル心理学（e.g., Ferrer, 2017）は，超越的存在を文化的・認知的側面へ還元して理解することに慎重な立場をとりつつ，実証的・経験的に探究してきたが，これらの学術コミュニティや宗教家との対話は，超越的存在や，それを巡る人間の心理特性への理解をさらに深める契機になるだろう。

引用文献

Ferrer, J. (2017). *Participation and the mystery: Transpersonal essays in psychology, education, and religion*. SUNY Press.

Gomes, C. M., & McCullough, M. E. (2015). The effects of implicit religious primes on dictator game allocations: A preregistered replication experiment. *Journal of Experimental Psychology: General*, 144, e94-e104. https://doi.org/10.1037/xge0000027

Ishii, T., & Watanabe, K. (2021). Caring about you: The motivational component of mentalizing, not the mental state attribution component, predicts religious belief in Japan. *Religion, Brain, & Behavior*, 11, 361-370. https://doi.org/10.1080/2153599X.2021.1939767

小林 利行 (2019).日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか― ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から 放送研究と調査, APRIL 2019, 52-72. Retrieved from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf (2022 年 8 月 29 日)

興山舎 (n.d.). 月刊住職　興山舎 Retrieved from https://www.kohzansha.com/jimon.html (2022 年 8 月 30 日)

McCaffree, K., & Abrutyn, S. (2020). Big Gods, socio-cultural evolution and the non-obvious merits of a sociological interpretation, *Religion*, 50, 570-589. https://doi.org/10.1080/0048721X.2020.1712666

Miyatake, S., & Higuchi, M. (2017). Does religious priming increase the prosocial behaviour of a Japanese sample in an anonymous economic game? *Asian Journal of Social Psychology*, 20, 54-59. https://doi.org/10.1111/ajsp.12164

永井 貴子 (2022). 日本では違和感ない「無宗教です」の言葉も海外では危険　元大使が経験した"凍りついた"現場　AERAdot. Retrieved from https://dot.asahi.com/dot/2022082400091.html?page=2 (2022 年 8 月 29 日)

Schimmack, U. (2021). The Implicit Association Test: A method in search of a construct. *Perspectives on Psychological Science*, *16*, 396-414. https://doi.org/10.1177/1745691619863798

Shariff, A. F., Willard, A. K., Andersen, T.,& Norenzayan, A. (2015). Religious priming. *Personality and Social Psychology Review*, 20, 27-48. https://doi.org/10.1177/1088868314568811

Skjoldli, J. (2015). The backwash of Norenzayan's Big Gods: A post-review essay. *Numen*, 62, 639-660.

van Elk, M., Matzke, D., Gronau, Q. F., Guan, M., Vandekerckhove, J., & Wagenmakers, E. J. (2015). Meta-analyses are no substitute for registered replications: A skeptical perspective on religious priming. *Frontiers in Psychology*, 6, 1365. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01365

Whitehouse, H., François, P., Savage, P.E., Hoyer, D., Feeney, K. C., Cioni, E., ... & Turchin, P. (2022). Testing the Big Gods hypothesis with global historical data: A review and "retake". *Religion, Brain & Behavior*. https://doi.org/10.1080/2153599X.2022.2074085

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 34 号が発行されました。今号では，アラ・ノレンザヤン著『ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学』を大いに語るとの特集を組ませていただきました。

宗教心理学研究会では研究例会，ニューズレターなどを通して，今回の『ビッグ・ゴッド』といった国内外で話題になっているテーマを始め宗教心理学にまつわる様々なテーマについて議論し，検討する機会を持っていきたいと考えています。

これからもニューズレターを始め宗教心理学研究会に対する会員の皆さまからのご意見，ご感想をお待ちしております。(K.M)

発行：宗教心理学研究会
編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局
担当：松島公望［psychology-religion@office.so-net.ne.jp］
研究会ホームページ管理・運営
担当：藤井修平［yrsk.f@nifty.com］

研究会ホームページ
http://psychology-of-religion-japan.org/